## 世間解第四

令和四年十日 第四一六号

発行 西法寺

## 念仏もうさるべし

一信仰(二)

報恩講さまのご縁が続きます。
はっぱんにう まんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。お盆のご縁に遇い、秋のお彼岸まんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。お盆のご縁に遇い、秋のお彼岸まんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。お盆のご縁に遇い、秋のお彼岸まんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。おなので縁に遇い、秋のお彼岸まんだぶ…」とお念仏で相続のことと存じます。おなので縁に遇い、秋のお彼岸はいたがいかりました。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なん

**残**ల్ల

親鸞聖人はそのご生、涯をかけて法然聖人を師と仰がれ、」よののことができます。 往 生 う じょう りたる信心を、わがものがほに、とりかへさんと申すにや。 また師の恩をもしるべきなりと[云々]。 あるべからざることなり。自然のことわりにあひかなはば、 ればはなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、 きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あ 弥陀の御もよほしにあづかつて念仏申し 候 ふひとを、わが弟子と申すこと、みだ、 ホッス がはからひにて、ひとに念仏を申させ、候はばこそ、弟子にても、候はめ。 もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候ふ。そのゆゑは、 専修念仏のともがらの、せんじゅねんぶつ 生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。レメック わが弟子、ひとの弟子といふ相論の 候 ふらんこと、 法然聖人のお説はいる。 仏恩をもしり、 如来よりたまは かへすがへすも ゎ

人の離合は思いのままにならないことで、一緒に連れそこうことは、この上もなくぶしつけなことです。

た師の恩をも知るようになるはずです、と仰せられました。 しかし、おくよくみ教えを聞き、本願他力の道理にしたがっていくならば、おのずと、阿弥陀仏のご恩も知り、また本願をたのめと教えてくれらない」などということは言語道断です。阿弥陀さまからたまわった信心を、自分が与えたもののように、取り返そうとでもいうのでしょうか。そんなことは、決してあり、離れねばならない縁にもよおされたならば離れていくこともありますのに、は、別にならないことです。しかし、よくよくみ教えを聞き、本願他力の道理にしたが、はならないことです。しかし、よくよくみ教えを聞き、本願他力の道理にしたが、はならないことです。しかし、よくよくみ教えを聞き、本願他力の道理にしたが、はならないことです。しかし、よくよくみ教えを聞き、本願他力の道理にしたが、はならないことです。と仰せられました。

梯 實 圓和上はこのように現代語訳してくださっています。かけはしじつえんやじょう

ただくんです。」これも梯 實 圓和上のお言葉であります。まの覚りの世界から届く言葉に 自 らの"いのち"の意味と方向を確認させていたをしっかりと確認させていただくんですね。その上で、生死を超えた阿弥陀さとをしっかりと確認させていただくんですね。その上で、生死を超えた阿弥陀さいてこい!〉なんか言う人には決して付いていったらあきませんで。どこへ連れいてこい!〉なんか言う人には決して付いていったらあきませんで。どこへ連れいてこい、〈俺は悟った!〉〈俺は正しい!〉〈俺は間違いない!〉〈俺に付

蓮如上人はおっしゃいます。

٢

ひとをすすむべきばかりなり。

へそもそも、善知識の能といふは、一心一向に弥陀に帰命したてまつるべしへそもそも、善知識の能といふは、一心一向に弥陀に帰命したてまつるべし

かりと仰ぐものを持っておられるかどうかなのでしょう。 ご縁の方を先達としての師匠と仰がせていただく、大切なのはその師匠がしっ

おはたらきがあってくださる

師ご自身が同じ道を歩んでくださっていることの有り難さを思います。合善掌し、 じょん 紫色 から から 私 の進むべき道をはっきりと教えてくださる師を持つことの大切さと、そのもだっす。